

『ルイ大王の世紀』における比喩(2)

末松, 壽
九州大学名誉教授

<https://doi.org/10.15017/1191>

出版情報 : 文學研究. 100, pp.91-116, 2003-03-31. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

『ルイ大王の世紀』における比喩(2)

末 松 壽

前稿(1)において筆者は、「新旧論争」(la Querelle des Anciens et des Modernes)の文学史上ひいては思想史上の意味を指摘し、論争の開始をつげたペローの『ルイ大王の世紀』の作品としての「身分」を時代の文芸理論ともいべき修辞学の体系の中に位置づけ、次いでこの長詩において著者が駆使する論証ないし説得の手法である比喩(comparaison)を、若干の説明を加えつつ列挙してきた¹⁾。本稿においては、避けることのできないいくつかの理論と比較することによって、このペロー独特の比喩の形をより理論的に考察することを試みる。まず枚挙した具体例を、その論理を概念化することによって区分することが必要である。

III

比喩の区分

作品は論旨展開の枠組みについては分析的である。構成そのものが分析的な方法に従っている。著者は文化をそれを構成する諸領域に分割する。早々と戦争術に言及する序文の後、まず諸学問、哲学、自然学、生理学が、次いで文芸に移って叙事詩、演劇、その他の詩ジャンルが、次に絵画、彫刻、造園術、音楽、建築の各分野が新旧の比較の対象となる。『対比』において著者が称賛を惜しまないデカルトの方法に関する教えがそこで実行されているの

である。すなわち、

第二は、と『方法叙説』の作者は書いていた、私が検討するであろう難問の各々を、可能な限り、かつそれらをよりよく解決するために必要な限りの小部分に分割することであった²⁾。

しかし問題は小部分それぞれの検討の仕方である。そもそも分割とは問題解決にとって準備段階に位置する一つの手続きであって、それ自体は解決ではない。分割につづいて小部分の各々が解明されなければならないからである。あるいはまた、ペローの書き方は省略的でもあれば分析的でもある一種の三段論法に従っているということもできる。大前提：古代人と近代人とは比較することができる。ところで小前提は多くの命題の形で並列される。文化は様々な分野ごとに検討されるからである。もっともこの分割の正当性を説く命題は明示されてはいない。ペローは一挙に、ところで自然学においては近代は古代をこえた、望遠鏡や顕微鏡の発明による新たな発見が証拠である、という。さらに生理学においては、近代人は古代人の知らなかった血液循環を知っている。ところで雄弁においては……という具合にいずれも近代の優越を主張する命題を重ねていく。その挙句に、それゆえに……と結論するのである。もちろん省略に問題はあるだろう。全体性とは部分の総和に過ぎないのかという疑問があるからである。更に別の観点からペローの方法を説明することもできる。すなわち演説(文章)作成の観点からすれば、分割とは、古典修辞学の教える言説生産の四大部分のうち、論理的に「案出」につづく「配置」、つまり素材の配列の段階に対応する。続いて起草(そして発言)がなされる³⁾。この最後の段階において討論、主張や反駁が行われるべきなのである。

ところで小前提もしくは起草の段階におけるペローの議論の仕方は、極めて非分析的である。各項目そのものを更に小単位あるいは構成要素に分解し

てそれぞれを解明するのではない。そうではなく、一つの現象についての判断をくだすに際して他のものを参照し、これと比較しあるいは関連づけ、他のものによって照らし、もしくはそれとの差異を示すという方法である。そもそも主著の企ては全体としてそれ以外の何であったか。タイトルの掲げる「対比」(Parallèle)は雄弁である。

さて我々の枚挙した比較は、それをペローはしばしば«Tel»や«Ainsi»をもって導入するのであるから、ある意味ですべて同じ範疇に属するけれども、その論理構造に注目するならば二つに大別することができる。まずIは、建築物(例5)や天体・植物界・動物界(例7)のイメージであって、根本的な対立を見せる自然/文化の各々を「全体」ないし「集合」と呼べば、全体に関する討論においてその個別的で具体的な構成要素を挙げることに存する。(漢字の「例」をあてることのできる「たとえ」である)。この部類は、今はとりあえず全体と部分の関係に基づくと規定しておこう。もう一方のIIには、集合とそれが包括する部分集合の関係はなく、命題があらわす比較される事象とこれまた命題として現れる比較する事象との間に、ある論理的な類似、比例関係が措定されている。(譬喩のいずれかの字をあてることができる)。この部類は更に二つに区分される。一方(II-1)には、詩人の評価の時間的な成長を自然界における水の動きに比べる例1のような比喩で、一全体(Technē)に属する事行と別の全体(Physis)に属する事行が類比によって結合を見る場合である。例2(弁論の聴衆への効果と風の水に対する作用との比較)や例6(樅の成長の喩え)もこれに入る。他方(II-2)は、文化に属する一現象と同じ文化の他の現象との間で類推を行う場合である。例3(これについてはすぐに説明する)および例4(音楽の発達と人における言葉の習熟)そして例8(ヘロドトスとアリストテレス)はこの範疇に入る。リストにしよう。

I ……………例 5, (7) (個別の範例による集合の表象)

II……………1) 例(1), 2, (3), 6 (集合間の跨ぎ)

2) 例 1, 3, 4, 7, 8 (部分集合間の跨ぎ)

いささかの説明が必要であろう。例 3 (音楽の聴取と夜の天空の眺め) の比較は、すでに述べたように、まず二つの異なる全体間の (かつ聴覚と視覚の間の) 跨ぎとして開始される (II-1) もの、次いでそれは、音楽の原理の把握と天文学の知識といういずれも技芸に属する部分集合間の関係 (II-2) へと進展する。例 7 (造物主の恒常的生産性をしめす太陽、薔薇…) については、文字のレベルでは範例にすぎないが、これも先に示唆したように、論旨のレベルで自然三界と人間本性の発現との間の類比が暗示される限りにおいては、I から II-2 への移動のケースと見ることができる。最後に例 1 は、まず文化現象を自然現象にたとえる最初の段階では II-1 に属するが、次いでそれは前者に関して多様な部門 (古代作家、近代作家、絵画、彫刻) への展開をみせていて、それらはまた相互に類比関係にあると解釈できるのであって、その限りでは部分集合間の跨ぎの範疇に移行すると考えられる。

ところで、集合間においてであれ部分集合間においてであれ、一から他への跨ぎが成されるということは、すでに指摘したように、一方における事行と他方におけるそれとが対応し、前者をあらわす二つの名辞のとり結ぶ関係が後者における二項関係に比例するという理由による。象徴的な例をもってこれを図式すれば、古代文化 (A) と近代文化 (B) との関係は、若い櫂 (C) と老いっつつある櫂 (D) との関係に等しい。すなわち、 $A : B = C : D$ が成立する。この場合、二つの事象の通時的関係が問題であるのだから、対を構成する二つの象徴は一方のみでは不十分であって、他をともなってこそ十全な意味を満たす。つまりそれらは複合的でなければ存在意義を充足しない。比例式の法則に従って成立する書き換え、 $A : C = B : D$ もこの条件のもとで理解されなければならない。以上の形式化は、必要な字句の変更を加えれば II-1 およ

びII-2の全ての場合について有効である。

さて、たとえの機能の仕方をもっとよく観察するために、比喩の研究において考慮せざるを得ない知見を提示した二人の詩学者による研究を参照しよう。

選択と組合せ

まずヤコブソンの有名な論文「言語活動の二つの側面と失語症の二つのタイプ」⁴⁾がある。失語症には二つの部類があって、その各々は言語活動の基本的な二つの側面に対応する、というのが論文の主旨である。我々の主題に関わるのはもちろん言語活動の分析の方である。ソスユールの指摘に従って、ヤコブソンはこう書いている。

話すこと (speech) は、言語のある単位 (entities) の選択と、より高度の複雑さをもつ言語単位 (units) に向けてのそれらの組合せを含意する。(op. cit., p. 97; 仏訳 pp. 45-46)

例えば、話者はある語を選び (selection)、他のこれまた選ばれた語と組み合わせる (combination) ——ソスユールでは《rapports associatifs》(連想関係) および《rapports syntagmatiques》(連辞関係)⁵⁾——、つまり連結することによって文を構成する、という訳である。選択と組合せは言語活動の二つの基本的な作用である。著者は第二の作用についてソスユールの見解の若干の不備を挙げている (p. 99; p. 48) が、これは、第一の作用に関わる話者の自由の限界 (p. 97 sv.; p. 46 sv.) やメタ言語活動 (p. 103 sv.; p. 53 sv.) についての考察とともに我々の主題には関与しない。

ところで選択は類似性 (similarity) の把握によって可能になる。それは、類似した複数の単位の間で一つを選ぶ、もしくは一を他のものに置き換えることに存する。それに対して組合せとは、空間的もしくは時間的な隣接関係

(contiguity) の把握によって、パロルにおいて隣接関係あるいは文脈組織 (contexture) を実現することに他ならない (pp. 99-100 ; pp. 48-49)。

さて類似性および隣接性は、特権的でかつ代表的な二つの比喩、すなわち 隠喩 (metaphor) と換喩 (metonymy) とをそれぞれ規定する本質的な性質である、と著者は指摘する。「代表的」と我々が形容する所以は、これらは、ヤコブソンが二つを「両極をなす話の文彩」*« two polar figures of speech »* (p. 105 ; p. 56) と呼んでいるように、彼において最重要の文彩であるのみならず、修辞学の挙げる他のいくつかの文彩をも含みあるいは統合すると判断されるからである。この点については後に検討する。

ヤコブソンの指摘は我々の考察にとって示唆的であろう。先に抽出し二三のタイプに分けたペローにおける比喩はじっさい、隣接関係にもとづく換喩の作用もしくは類似関係による隠喩のそれとして定義できるように思われる。全体と部分との関係に基礎をもつ部類 I は、部分が全体に結合しある意味でこれに接する限りにおいて、換喩に属するのではないだろうか。他方、文化に属する一事象を自然界の現象にであれ、同じ文化の他分野の事象にであれ比較するのは、明らかにそれらの間の類似性に基づいてである。II の部類はこうして言語活動のもう一方の基本的作用、隠喩の利用に他ならないといえるだろう。

上の二通りの同定の是非を検討するまえに、ここで括弧を開き、詩学者の面目を如実にしめず観察を報告しておこう。

これら二種類の関連づけ (類似関係と隣接関係) を、それらのもつ二つの (位置的ならびに意味論的) 側面において選択し、組み合わせ、序列化 (ranking) しつつ操作することによって、人はその個人的なスタイル、言語上の趣味や偏愛をあらわにする。

言語芸術においては、これら二つの要因の相互作用はとりわけ明白に示される。(p. 110 ; p. 62)

そして著者は文学史およびその他の記号システムによる芸術（絵画と映画）からいくつかの例立つ例、特に一方への偏向を見せる例を与えている。『ルイ大王の世紀』においては、二種類の操作はいずれも現れているものの、頻度から判断するならば類似性への傾斜を認めることができるだろう。

しかし、ヤコブソンによる言語活動の分析を適用することによって、作品におけるたとはより厳密に記述できるであろうか。二種類の比喩による特徴づけが可能になる限りにおいて、言語学者の見解が一つの観点を与えてくれることは確かである。けれども、確立されるか見える対応には不満ものこる。というのは、全体による部分の包括は隣接関係にまったく無縁ではないにしても、そもそも「隣接」とはもっと端的な様態なのであって、二単位の空間的もしくは時間的な文字通りの隣接ないし接触を意味する概念であるからして、Iの部類を換喩と定義することは、部分と全体という端的な関係を、もしかしたらより包括的ではあるにせよ、それ故に曖昧な概念の下に統合することになるからである。実際Iのプロセスは、修辞学ならより適切に提喩 (synecdoque) の名で呼ぶであろう。オリヴィエ・ルブールはこの文彩を説明して、

提喩は部分によって全体を意味し得る。例えば「頭」によって人を。あるいはまた種によって類を意味し得る。例えば農業は通貨を救うだろうの代わりに「麦穂はフランを救うだろう」。逆に、人に代わる「死すべきもの」は類によって種を意味する⁶⁾、

と述べている。ところでヤコブソンは提喩をあえて換喩に還元しているのがある。その明らかな証拠を一つあげる。

絵画史から顕著な例をとれば、とヤコブソンは書いている、キュビズムの明らかな換喩的方向がある。そこでは対象 (object) は一連の提喩 (a set of synecdoches) に変形されている⁷⁾。

厳密に言えば、隣接の名においての同一視は、(提喩を基礎づける)従属性と(換喩を基礎づける)等位性との論理的差異を無化することになるのである⁸⁾。

他方、類似性をもっぱら、ヤコブソンの習慣的な思考方法である一対の二項間の関係(parallelismないしbinarism)について語られているのであって、二対の二項関係にこれを応用することは、可能な準用ではあれ、複雑なものの複雑な構造を見逃す恐れがある。要するにヤコブソンによる分類の適用は、あるいは精密なものをグローバルなものの中に埋没させ、あるいは複合的なものを単純化することになる。それは問題の解決にとって遠からずといえども当たらず、というべきであろう。

こうして我々はもう一人の、今度は古代の詩学者の文献に向かうことになる。近代派の論客にこれを援用するのはいささか皮肉であるが、アリストテレスの『詩学』における「メタポラ」の分析を参照しなければならない。

メタポラ

この概念が話題になる『詩学』第21章の著作全体における思想的な位置、あるいはメタポラのもちうる同書の基本的な諸命題との関連をここで取り上げることはできない。また他の作品、とりわけ『弁論術』を参照して哲学者におけるこの概念の総合的な考察を試みることも断念せざるを得ない。いずれも本論の枠に入りきれない主題である。我々は『詩学』におけるメタポラの定義およびその種類に関する件に考察をかぎる。

メタポラとは何か。アリストテレスはこう書いている。

Metaphora de estin onomatos allotriou epiphora... (1457 b 6-7)

語の転用(比喩)というのは、あるものごとに対して、本来は別のものごとを名指す語を適用することであり.....⁹⁾

先ずメタポラは、この語を受け継いだ西洋諸国語がしめすところの限定をもたない。それは（例えばヤコブソンで見たように）メトニミーに対比される一つの文彩の名ではなく、文字どおり「*epiphora*」すなわち移し換え、移動、転移を意味する¹⁰⁾。何の転用なのか。「*onoma allotrios*」の、である。「*allotrios*」は「他にかかわる」を意味する。自明でないのは「*onoma*」の方である。第21章におけるこの語の意味を明らかにするために、ここで一つの注をひらく。

『詩学』第21章における「*onoma*」

周知のとおりこれは通常「名前」を、そして文法学の用語としてしばしば動詞 (*rhēma*) との対比で「名詞」を指す。英仏語訳は前者でもってこれを置き換えている¹¹⁾。しかし注意しよう。デュポン＝ロックとラロは章冒頭から現れるこの語について次のように注釈しているのである。「*Nom* はここで総称として理解しなければならない。同時に名詞（文法的な狭い意味での）と動詞とをカバーするのである」（D.-R. et L., p. 340）。総称とはすなわち「語」「単語」を意味する。注解はこの解釈——それ自体、まもなく現れる類の代わりに種の名を転用するメタポラである——を殊更に正当化する理由を上げていないのだが、我々はそれを試みるができる。

1) まずギリシア語の「*ὄνομα*」には（ラテン語の「*nomen*」と同様に）この語義での用例が他にも見出されること¹²⁾。少なくとも可能性を開く事実である。

2) 重要なのはしかし、メタポラとその種類を説明する都合10個の例文のうち、4個はまさに動詞の転用の例に他ならないことである。この事実は章の文脈における「*onoma*」の意味が名詞に限られないことを証言する。

3) しかし、解釈が章全体の論旨に整合するか否かを検証しなければならない。テキストは転用に関する議論に先だって、まず章の冒頭で「*onoma*」を二通りの分割で区分している。第一は、音節による語の形成からする形態論上のそれであって、一方に「単純構造の語」、他方に「二重構造の語」……「多重構造の名詞」を対比する（1457 a 31-36）¹³⁾。もちろんこの件における「*onoma*」を「名詞」と理解することは容易であるし、著者の挙げる二つの例も名詞（または形容名詞）¹⁴⁾である。続いてメタポラも現れる第二の分割は、8種類を列挙している。すなわち、

『ルイ大王の世紀』における比喩(2)

名指し言葉はすべて、つぎのどれかである。(1)通常語、(2)稀語、(3)転用語(比喩)、(4)修飾語、(5)新造語、(6)長くされた形の語、(7)縮められた形の語、(8)変形された語。(1457 b 1-3; pp. 332-333)¹⁵⁾

8種類以外の部類はないという全称命題である。ただし分類の基準は二重であって、前半の4種類の識別では使用法が基準となっている。後半は形成法による分類である。ということは、通常語に対比される全ての「*onoma*」は(2)から(4)のいずれかに属すると同時に(5)から(8)のいずれかにも属するということである。さてこの文章における「*onoma*」を名詞と理解することは困難になる。説明のための例文は大部分は名詞であるが、すでに指摘したように「転用語」の例として動詞も現れているのである。それゆえむしろ、例外が規定する外延の大きい語義を以上二つの件に適用するのが妥当であろう。多重構造の語は当然に動詞その他の品詞をふくみ得るし、動詞が第二の区分の設ける8部類にとってア・プリアリに無関係である筈もない。「*onoma*」を「単語」として読むことに支障はない。

4) しかし「*onoma*」の総称としての理解は、章の最後に現れるもう一つの分割においては不可能になる。すなわち「これらの名詞(名指し言葉) *そのものは、男性のもの、女性のもの、中性のものに区別される*」(1458 a 8-9; p. 335. 強調引用者)と哲学者は書いている。ギリシア語における名詞(形容名詞をふくむ)の文法的性区分の指摘である。性は分詞を別にすれば、形態論的には少なくともギリシア語の動詞には絶対に関与しない現象である。だがたじろぐ前に、この文を開始する主語の提示の仕方に注目しなければならない。日・英・仏四通りの翻訳を見ても推測できるように¹⁶⁾、テキストは「*Autōn de tōn onomatōn ta men arrena...*」(直訳すれば「*「onoma」そのもののあるものは男性で.....*」。斜字体および強調点筆者)で始まっている。先の二つの区分の場合には無かった「*autos*」の付加は何を意味するのか。デュポン=ロックとラロはこれをいとも簡単にこう解説している。「*noms « eux-mêmes » (autōn)*. すなわち「動詞」に対立する限られた意味での名詞である」(p. 352)。実際、性別の区分がもし先行する分割と同列のものであったとしたら、この強調あるいは限定の語は不必要であったであろう。

翻訳および注解をめぐる以上の注釈によって、章の正確な読みの条件は確保されると思われる。語の転用の考察にもどらう。『詩学』は文章を切断す

ることなく転用の定義からその種類の列挙に入っていく。曰く、

.....その適用のされ方には、(i) 上位の「類」を示す語がその中に含まれる「種」に対して適用される場合、(ii) 「種」を示す語が「類」に対して適用される場合、(iii) 「種」を示す語が別の「種」に適用される場合、(iv) 比例関係に従って適用される場合がある。

(1457 b 7-9 ; p. 333)

著者はそれぞれに例をあげて説明している。(以下例文の出典は考慮しない)

(i) 「類から種への転用」

例：「ここにわたしの船が止ま^ゝう^ゝて^ゝい^ゝる」

説明：「なぜなら、「錨泊していること」(hormein) は「一般に何かが止まっていること」(hestanai) の一種であるから。」(1457 b 10-11 ; p. 333)

もちろんさきに指摘した動詞の例である。相関的に学術用語「類」「種」は、後世の典型的には博物学におけるような限定をもたず、もっと広い意味で、動詞の外延についても、また次の例が見せるように形容名詞についても適用されることが分かる。

(ii) 「種から類への転用」

例：「オデュッセウスは万と数え^ゝる^ゝり^ゝつ^ゝぱ^ゝな^ゝ働^ゝきを^ゝな^ゝし^ゝと^ゝげ^ゝた」

説明：「なぜなら、「一万」は「多数」の一種であり...」(1457 b 12 ; *ibid.*)
更なる説明は不要であろう。

(iii) 「種から別の種への転用」

例：「青銅の刃でいのちを汲^ゝみ^ゝと^ゝつ^ゝて...」「すり減ることなき青銅の器に水を切り^ゝと^ゝつ^ゝて...」

説明：「なぜなら、これらの詩句においては、一方では切りとることが「汲みとる」と言われ、他方では汲みとることが「切りとる」と言われていて、どちらの語も「何かをとり出す」ということの一環であるから。」(1457 b 14-16 ; pp. 333-334)

注目すべきは、まず対照的な二つの例文においても動詞の転用が問題であること、そして« arusiai » (汲みとる) と « tamein » (切りとる) とはいずれも « aphelein » (とり出す) の種とされていること、である。これらの転用は、注解が指摘するようにそれぞれの意味を包括する類概念の媒介によって可能になる¹⁷⁾。

(iv) 「比例関係」

説明：「第一のもの(A)に対する第二のもの(B)の関係が、第三のもの(C)に対する第四のもの(D)の関係と同様である場合に成立する。なぜなら、この場合、ひとはBの代わりにDを言い、あるいは、Dの代わりにBを言うであろうから。」(1457 b 16-19 ; p. 334)

すなわち、 $A : B = C : D$ を支えにして、BとDとを移し換える手法である。もちろん藤沢氏により「比例関係」と訳された« analogon »は「比例」とか「類比(関係)」と訳して差し支えない¹⁸⁾。ところで著者は、使用法における若干の差異に応じて三対の重複した例と単独の一例とを挙げている。最も明白に定義を説明する例と動詞が使われる場合のみをここで引用すれば十分であろう。

例1：「人生と老年との関係は一日と夕暮との関係に等しいという場合、ひとは夕暮のことを「一日における老年...」と言い、また老年のことを「人生の夕暮」とか「人生の日没」とか言うであろう。」(1457 b 22-25 ; *ibid.*)

例2：「比例関係にある諸項のうちのどれかが、それを表現する既成の語をもたない」場合にもメタポラは形成される。たとえば「太陽からの炎をふりまくことを表現する語はとくにない」が、「日光とこの名前をもたない行為との関係は、種と蒔くこととの関係と同じであり、まさにそのゆえに、「神のつくりし炎を蒔きながら」と言われるのである」(1457 b 25-30 ; p. 334)。すなわち転用によって単語の欠如を代補する、後世いわゆる濫喩(*catachrèse*)である。これまた動詞に適用されている。

以上が『詩学』における4種類の転用の分析である。メタポラとこれを語

源とする近代語の用語との異同を確認するために、一二の注釈を見ておこう。まずルーカスは「メタポラなる用語は英語の《metaphor》より広い意味で用いられていて、後者はアリストテレスの挙げるもののうち主として第三および第四のタイプに限定される」と書いている¹⁹⁾。メタポラをメタファーの語義をとおして観察するかぎりにおいては、注釈が妥当であることは言うまでもない。デュポン＝ロックとラロも語の移転は「規制されたプロセス」であって「厳密に定まった行程」に従うと述べた後、「四種類の転移の可能性の列挙にはある進展が指摘される」という。第一種から第四種にかけて非的確性つまり隠喩性は度を増すというのである。ルーカスの注と大同小異のコメントである。第三種および第四種においてはいわば意図的なカテゴリー・エラーが成されるのである。

以上の紹介と解説を踏まえて、ペローの「たとえ」と詩学者たちの分析とを交差させなければならない。

交差

我々はペローの比喩とヤコブソンによる文彩の二大区分との対比をすでに試みた。今はまずヤコブソンの学説をアリストテレスのメタポラの定義と比較しよう。『詩学』の提唱する第一種（類の語の種への転用）および第二種（その逆の適用）は、大まかには隣接性を基礎にしていて、ヤコブソンはこれを換喩の側に位置づけるであろう。けれどもそれらは正確には換喩ではなく提喩であって、後者の前者への還元は論理的な不都合をまねくことはすでに指摘した。他方、類似性は第三種（種の語の別種への転用）および第四種（比例関係の利用）を特徴づけると思われる。ただしそこでは、二つの連辞ないし文脈、あるいはペローにおいてと同じように二つの事行、二対の二項関係相互の類似性が問題である。もちろん二つの動詞「汲みとる」と「切りとる」自体が「類」としての「とり出す」の「種」である限りにおいて、それらの間にはすでに媒介された間接的な類似性があることは否定できない。け

れどもそれが転用の根拠となるに十分明確になるのは、一方は「器」や「水」と、他方は「刃」や「いのち」と連辞を構成する時に限られることを見落としてはならない。もっと明らかなのは、葡萄酒を飲むための盃と身をまもるための盾の例であろう。それらは事物として似通っている訳ではなく、たかだか上位の「道具」概念において結びつくにすぎない。二つが十全な類似性にあずかるとしたら、ディオニュソスおよびアレス二神それぞれに特有の属性という文化的な規定つまり文脈をもつからである。夕暮れと老年もまた、それぞれ言語文脈において優れて類似性を獲得する。要するに、隠喩と換喩の二大文彩としての規定は抽象的な全体化であるために精密さを掬いあげ得ないことになり、せいぜいある種の妥当性をもつにとどまる。

ちなみに両者のある出会いを確認しておこう。『詩学』はつづく章において明晰でありかつ平俗でない措辞の在り方を説き、様々の種類の語（変形語、複合語、稀語）の適切な使用を勧めたあと、こう述べている。

しかしそれにもまして最も重要なのは、語の転用（比喩）の能力をもつということである。ただこの能力だけは、他人から学んで得られるというものではなく、それはまことに天賦の才のしるしというべきである。なぜならば、語のすぐれた転用（比喩）をなすということとは、事物のあいだに類似を洞察することにほかならないから。(1459 a 5-8 ; p. 339)

« euphuia » の「天賦の才」なる訳語は強いが、とにかくそれは生まれつきの能力、優れた資質を意味する。ヤコブソンはこの件に応えるかの如く、さらにはこれを進めて、特定の作品や流派における特定の比喩への傾斜を見たのである。しかし上のテキストは、最後に注目すべき示唆をふくんでいることを見逃してはならない。メタポラの使用は事物の間の類似性 « to homoion » の発見を前提にするという指摘である。つまり認識をである。このことは、とりわけ比例関係に基づくそれについて言える²⁰⁾。ということは読者（観

衆) もまた認識に与かり得ることを意味する。更に制作における類似性の実現とは「模倣する」ことに他ならないのであるから、悲劇のもつ6大要素の一つ、「措辞」の問題系に属するがゆえに論じられるメタポラは、他方また、デリダも指摘するように²¹⁾、「文学」や芸術の定義そのものにも関連していることが分かるだろう。

しかしペローにもどらなければならない。まず長詩の開く問題連関から『詩学』を読む時、前者においては複数の部分集合間に類比が存在する事例が見られたのであるから、同様の事態が後者の対応する分類肢(iii)においては見られないのか、と問うことができる。実際すでに指摘したように、比例関係は種から種への転用を説明する例の内にも発見できるのである。なぜならば、「いのち」(A)を「切りとる」(B)ことは「水」(C)を「汲みとる」(D)ことに匹敵する(A : B = C : D)からである。そして逆もまた成立する。注解者も指摘しているように、比例関係に基づくとされる太陽の炎への「蒔く」の転用は「種を(蒔く)」の別種(無名の行為)への移行として記述され得たであろう。その場合、総称は「遠くに投げる」である(p. 348, n. 7)。レベルの変更が許されるならば、真先に挙がるディオニュソスとアレスの例についても同様のことが言えるだろう。神神とその属性(持ち物)は「種」として、そして固有名をもつ二神とそれぞれの属性、盃および盾とは「個」ないしタイプと見做すことができるからである。こうして「類比による転用は他の転用から完全には分離されないことがわかる。」(D.-R. et L., *ibid.*)

次に、逆の方向をたどってアリストテレスからペローを読むならば、『詩学』で重要な二重の論理的概念すなわち類・種および媒介のそれがペローの長詩においては必ずしも明示されていないことに気づく。もっとも先ず類・種の概念については、我々はIの事例を全体と部分との関係と規定することによって含意的にはこれを語ってきた。実際、「あばら屋」や「宮殿」⑤は建築の「種」であり、「太陽」「バラ」「ジャスミン」「鶯」⑦は自然界の(種で

ある「界」(règne)の、そのまた下位の)種であった。では、IIの2)について問うて然るべき媒介についてはどうか。確かに『ルイ大王の世紀』が明言することはないとはいえ、それは推論の前提にはなっていると思われる。実際、バラや鶯の不変性と人間の才能のそれとの類比(⑦の第二段階)は、造化の同一性がこれを保証すると思われる。同じように、④におけるまた①③のそれぞれ後の段階における類似性(音楽および言語の魅惑、詩と美術ジャンル、音楽学と天文学)は上位の文化概念によって媒介されるのではないだろうか。

この推論はしかし、少なくとも⑦に関する限り、一種の論点先取によってペローの方法を歪曲する恐れがある。IからIIへの移動を示す著者の論議を再構成しなければなるまい。彼は造化の恒常性という承認された「原理」からの演繹によって個々の事例を挙げるのではない。まず原理を確立することが先決問題なのである。まさにそれが異論に曝されている(v. 445-446)のであるから。ところで事例は、そこからの帰納によって原理を推断し承認させるための装置、それも複雑な装置である。というのも、鉱物界を代表する太陽はまず鉱物界の恒常性を、同じようにバラは植物界のそれを、そして鶯は動物界のそれを例証しなければならないからである。こうして得られた三界それぞれの恒常性は、次にそれらによって構成されると同時にそれらを統合する全体の同一性を証明することになる。その後、確立された自然界の恒常性を原理として、そこから人の才能の不変性を演繹するのである。①③④については該当箇所に考察の手がかりはないが、巨大文脈を考慮して、明示されないテーゼ——文化はある全体性を構成しつつ前進する——を主張するための範例と解するならば、そこにもまた帰納法による推論を見ることができよう。少なくともテキストは媒介の思想をあらかじめ仮定することを許さない。それに対して『詩学』テキストは、メタポラの可能性の理由として類による媒介をア・プリオリに挙げているのである。

交差読解を終えるために、ペローの比喩と『詩学』のメタポラとの差異を

指摘しなければならない。というのも、前者のIIの類は「類比によるメタポラ」(iiiも含み得る)に対してある重大な差異を有するからである。もちろんそれが二対の二項関係の間に存する比例を見せることに変わりはない。けれどもペローの方はまさにそこ、比例関係の確定に止まるのである。環境文脈における語句レベルでの隠喩を別にすれば、比例式に基づく転用の操作は行われぬ。4項の間での項の入換えによる作文——例えば「(古代)文化が老いた樅となる時」とか「(現代)文化が若き樅たりし時」——は要するに無い。すなわち比喩の第II類はメタポラではないのである。むしろ、導入の語句(Ainsi, Tel)の頻繁な介在と相俟って、ペローの比喩は本質的に、但し命題がしめすところの事行間のそれという特殊性をもつ「直喩」(comparaison)と定義すべきである。それも入念な。というのもペローは「文化は樅の木のごとく成長する」のような省略文に満足することはないからである。以上でペローの比喩と『詩学』におけるメタポラとの間の同一性と差異の考察をおえる。

では、ペローにおいて比喩はいかなる意義や目的をもっていたのであろうか。

IV

方法としての比喩

『ルイ大王の世紀』の比喩は、バルトが語るような、装飾ないし品位の要請が規定する「慣習」とかお決まりの「儀式」として、あるいはアリストテレスが教えるような、通常語に付帯する平俗性を脱するための手法として説明できるであろうか。もちろんそれらの要因を排除することはできないし、その必要もない。けれども、それはまた同時に分からせ説得する使命も担っていると理解すべきである。著者自身そのことを意識していたと思われる。というのも、長詩をふまえて制作される『新旧対比』においては、類推による

論証は作品全体を組織する一つの方法となるからである。「序文」において作品の構成を語る著者は、最初の二つの対話を紹介した後でこう書いている。

続く対話では、我々がそこにおいて古代人に勝ることに議論の余地のない天文学、地理学、航海術、自然学、力学およびその他すべての知識を論じよう。そしてそこから雄弁および詩——そこでは人々は我々に上席を譲らないどころか、我々の方がひどく劣っていると主張している——へと向かうのである。この方法は、次のような極めて当然の帰納法的推理 (induction) を提供するだろう。すなわち、もしその秘密が計算もでき測定もできる技芸において我々が明らかに優位に立っているとしても、詩および雄弁の美のような趣味と想像にかかわる事柄について人々を納得させることは不可能であるために、ひとえにそのために他のあらゆる技芸においてとは違って、我々はこれら二つにおいて勝者として認められないのである、と²²⁾。

晦渋な文章であるが、まず少なくとも著者が、議論の余地のないものから始めて係争の的となっているものへと向かう意図を宣言していることは明らかである。異論の余地のないものとは諸科学であり、係争の的となっているものとは文芸である。前者は「計算され測定され」得る。しかし文芸における美はそうではない。それは趣味 (goût) および想像 (fantaisie) の事柄であり、数値化や定量化をこぼむ。それ故に他人の説得は不可能なのである。

文芸の美について他者の納得を得ることができないとすれば、その新旧の優劣についての説得もまた可能である筈はない。ペローの企てには当初から挫折が約束されていたのではないだろうか。それは要するに無駄な仕事ではなかったか。じっさい、長い討論の末に著者を代弁する修道院長もあらゆる学問・技芸における近代の優位を確認した後、「雄弁と詩」については一種の判断停止をもって対話を締め括らざるを得ないのである。曰く、

雄弁と詩については、別様に判断する理由は全くないのですが、お互いが円満である

ためにこの件については何も決定してはなりません²³⁾。

「序文」から結論への道のりは遠かったものの、結局は説得不可能の確認に立ちもどる。しかしペローは、まったく無駄と知りつつそれでもなお10年にわたって膨大な著作を制作したとは考えられない。輝かしい勝利はないにしても、地味なしかし恐らくもっと重要な努力や作業そして成果は考えられるのではないであろうか。

第一に、説得の不可能性こそが近代の優越の承認を妨げる唯一の理由であるのならば、仮にこの事由がなかったならばどうなるか、と問うてみよう。障碍は取り除かれ、近代の優越は他の諸技芸についてと同様に、これらに倣ってつまり類推的帰納によって承認されるであろう。廻りくどい「序文」の文章で著者が暗示するのはその事であると我々には思われる。もちろんそれは仮定的推論にすぎない。「趣味と想像にかかわる」という伝統的な文芸の規定のために、ペローは言表のレベルでは議論を弱めずにおかない仮定に訴える他はない。もっとも、帰納法による類推をもって『ルイ大王の世紀』の全体的方法とすることはできない。二重の事実が障碍となる。まず両作品における主題の配列が異なることである。長詩の方では、「その秘密が計算され測定される技芸」とそうでない技芸とは、分散的に配置されるパラダイグムにすぎない。相関的に、前者に関する言及は後者に比べて乏しいのみならずまた点的である（望遠鏡と顕微鏡 v. 41-58, cf. v. 389-396；血液循環と消化 v. 61-64）。次に作品の規模からくる制約はあるにせよ、長詩には地理学や航海術、力学に関する言及はまったく無い。

けれども、帰納ないし類推による論証をペローがそれぞれの比喩の箇所、また時には複数の例の間で企てていることは確かである。とりわけ比喩の列挙において真先に挙げた一連のケースは注目すべき証拠となる。繰り返すなら、古代の詩人たちは現代では大詩人と目されている。ちょうどそのように泉は時間の経過とともに大河となる。そのように現代の作家たちは、ま

たそのように現代の画家ル・ブランは、同じようにヴェルサイユを飾る彫刻群も将来は栄光に包まれるであろう。現代作家以下の事例は、古代作家の例に発して帰納的に結論された原理(時間の作用)——しかもこれは Physis に属する事実が支えてもいる——からの演繹によって得られると解釈することもできるが、また逆にすべての事例は帰納法による原理の確立を確認するパラダイグムに他ならないと見ることもできるからである。

第二に、含意のレヴェルにおいてはもう一つの可能性もあるだろう。文芸の伝統的な位置づけそのものに従っても、語ることの意義はまったく無い訳ではあるまい。美は数値化をこぼむとしても、美的判断能力である趣味によってそれを感じかつ味わうことはできよう。自ら体験し自己を納得させることはできる。それゆえ語る人はその言葉によって、各人が自らの審美眼にもとづいて判断するよう促すことはできるのである。解決に向けてのより積極的な方策である。けれども、これは全体として暗黙の前提になっていることは疑えないにしても、『ルイ大王の世紀』においては主題化されていない。

第三に、端的な困難は、いかなるプロセスによるにせよすでに古代の優越を確信している人々に対する働きかけであろう。美や価値にかかわる事柄において、他人にその意見を変えさせることはできるだろうか。そのような試みは、ペロー風の比喩で言えば、あたかも恩寵の無償性を信じ、従って無神論者に言葉でもって信じさせることはできないと知りつつ、それでもジャンセニストが試みる護教論の企てに似ている。「神を探さなければならない旨の書簡のあと、障碍をとり除くようにとの書簡を書くこと...」²⁴⁾とパスカルはノートしていた。そして事実、『対比』の「序文」には、先の文章の否定的な意味を緩和する実際的で楽天的ですらある覚悟の表明も見られるのである。ペローはこう宣言している。

だがこの企てにはほとんど際限がなく、とうてい私の力では不十分であるとはいえ、私は確信している。先入観を克服し自分自身の知識をもちいる勇気のある人なら誰であ

れ、これを納得させるに十分のことを私は述べるだろう、と。(「序文」、p. 12)

さまたげとなる先入観 (prévention) を克服する——とり除く——よう人々に求める。自己の趣味への回帰を勧める。それこそは近代文芸の「アポロジスト」が努めなければならずまた努め得る仕事であった。それゆえ著者は、真先に「古代人に対する好意的な先入観」を吟味し、古代派を代表する登場人物である法院長を標的としてそれをつき崩すことから『対比』を開始したのである。けれども、これまた先行する詩における意識的な方法であったとは言えない。そこでは古代への偏愛はせいぜい何回か指摘され皮肉の対象となるにすぎず、作者はむしろ類比による推論の手法を駆使して時の効果による名声増大のテーゼを立証することに専念するのである。

しかしこのような類比による推論は有効なのか。これが我々の最後の問である。

結 論

時間の効果としての名声成長の主張は、領域 (詩 / 絵画 / 彫刻) さらには時間軸を換えつつ (過去→現在 / 現在→将来) 頻繁に現れるとはいえ、堅固な論証を構成しているとは判断し難い。立論そのもの、あるいは立論の条件のうちすでに脆弱さは潜んでいる。評価が時代から時代にかけて増大したことを説明するために、ペローは、現代において名声を博している数人の古代詩人たちが彼らの時代には必ずしも有名ではなかったという証言を援用する。

Ecoutons Martial, Menandre esprit charmant,
Fut du Theatre grec applaudi rarement;

『ルイ大王の世紀』における比喩(2)

Virgile vit les vers d'Ennius le bon-homme,
Lûs, chëris, estimez des Connoisseurs de Rome,
Pendant qu'avec langueur on écoutoit les siens;
Tant on est amoureux des Auteurs anciens,
Et malgré la douceur de sa veine divine,
Ovide estoit connu de sa seule Corinne,
Ce n'est qu'avec le Tems que leur nom s'accroissant... (v. 155-163)

マルティアリスに聴こう。魅力的な才知のメナンドロスは
ギリシアの劇場でめったに喝采されなかった。
ウェルギリウスは好人物エンニウスの詩句が
ローマの玄人に読まれ愛され評価されるのを見た。
その一方で彼の詩句は無気力に聴かれた。
それほど人は昔の作家が好きなのだ。
神々しい感興の甘美さにもかかわらず、
オウィディウスはその『コリンナ』でのみ知られていた。
彼らの名声はひとえに時間とともに増大し.....

実際、この指摘に疑問を立てることは容易である。メナンドロスは、生前の人気の平凡さはともかくとして、17世紀フランスで名声を得ていたのか。この「類稀な才能」(v. 149)の作家のテキスト写本はそもそもどれほど残存していたのか。そしてその後はどうか。古さのおかげでウェルギリウスよりもっと愛されていたというエンニウスは、ペローの時代には更なる人気を享受していたのか。

同じことは、湧き水の成長との比較の後、

Donc quel haut rang d'honneur ne devront point tenir
Dans les fastes sacrez des Siecles avenir [sic] (v. 171-172)
それゆえ来るべき諸世紀の聖なる年代記において
どれほど高い名誉の地位を占めないことがあるのか

が導入する一連のアカデミー会員、とりわけ創立時の会員であるメナール、ゴンボー、ラカン、ゴドーの名声についても言える。それにサラザン……。彼らの功績がいかなるものであったにせよ、もはやいわゆる「煉獄」をすら語れないほど、彼らは忘却の淵に沈んでいるのではないか。もちろんペローによる名指しには、アカデミーを、その創立者や保護者であるリシュリウやルイ王の功績を讃える意味もある。けれども彼が挙げるのは全てのアカデミー会員ではない。彼による選択の事実そのものが、その議論の弱点をあらわにせずにはおかないであろう。選択はすでに一定の価値判断を前提とするし、しかも価値観それ自体が維持されていくとは限らない。作家や作品の生き残り、つまり集団的な選定・淘汰は、ペローその人についても無関係ではない。文芸共和国が昔話作者を選び、批評家や詩人の方は放置していることを我々は知っている。時間の効果があるとしても、それはまた選択的なのである。

更に根本的な困難については数行の指摘でこと足りる。哲学者が教えるように、比喩は相似たものを発見させ認識の形成に参加するとはいえ、その上読者に喜びさえも呼びおこして説得に貢献することがあるとしても、それによって命題が証明されるわけではない。命題の真偽は、比喩の導入する事行の真理性に依存しないからである。要するに作家の名声は、たとえ全世界の泉が大河を形成するとしても、それと同じように成長するかどうか実はまったく判らないのである。

いわゆる「舌足らず」なために強引なペローの立論²⁵⁾はしかし、その欠陥のせいで逆に方法論上の要請を示唆するかと思われる。そしてそれが我々の最後の考察となる。

全体(E)は一定数の部分(e1, e2 ... en)から形成され、全体と各部分との関係(E R en)は恒常的であるとしよう。もちろん他部分を害しての一部分の拡大や縮小、すなわち部分的な生成や消滅は絶対がない。要するに全体の構造は同一である。そして全体は時間の経過とともに(射影による図形の拡

『ルイ大王の世紀』における比喩(2)

大のように) 発展するとしよう。この条件のもとで、もし先行する段階の一部に対する後続する段階の対応部分の優越が証明されるなら、他の任意の部分についても同じことが言えるであろう。すなわち喩える Technē は喩えられる Technē を証明する。しかし文化における構造の不変性は証明できるのか。むしろ我々は1966年このかた、構造の変化やダイナミックな性質をこそ確認してきたのである。他方 Physis の現象が Technē のその模範となるためには、一方ではそれら相互の関係 (EP R ET) が一定でなければなるまい。ところで後者は「増大」と「純化」を続ける。では原理的に自己反復しながら同一性をたもつ前者もまた進歩していくのか。さらに ET および EP はそれらを包括するでもあろう「大全体」との間に恒常的な関係を保っているのであろうか。我々の判断をこえる宇宙進化論の問いである。

注 釈

- 1) 前稿(1) (九州大学文学部「文学研究」第99輯、平成14年3月30日、17-44頁)の項目は以下のとおり。
序論
I. 『ルイ大王の世紀』——韻文による演説
II. 比喩の例 / 不均衡
- 2) Descartes, *Discours de la méthode*, *op. cit.*, p. 21.
- 3) ルブールは、案出 (invention)、配置 (disposition)、措辞 (élocution) そして身体の動きを伴う発声 (action) を列挙している (O. Reboul, *La Rhétorique*, « Que sais-je ? », P.U.F., 1984, 2^e éd., pp. 20-28). ラミはこれに記憶 (mémoire) を加えている (B. Lamy, *La Rhétorique ou l'art de parler* (1670), 4^e éd., 1699, Sussex Reprints, Brighton, 1969, p. 305).
- 4) R. Jakobson, « Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances » (1956), in *Language in Literature*, edited by K. Pomorska and S. Rudy, Harvard University Press, 1987, pp. 95-114 ; « Deux aspects du langage et deux types d'aphasie » (trad. A. Adler et N. Ruwet), in *Essais de linguistique générale*, t. I, Les Ed. de Minuit, 1963, pp. 43-67. 初版の翻訳とみられる仏訳に対して、1987年版には若干の増補・削除およびパラグラフ構成の変更がある。ここでの引用は1987年版による。
- 5) F. de Saussure, *Cours de linguistique générale*, Payot, 1972, pp. 170-180.
- 6) O. Reboul, *op. cit.*, p. 44.

- 7) 同じ還元はグリフィスの映画作品についてもなされる (R. Jakobson, *op. cit.*, p. 111 ; p. 63).
- 8) S. Ullmann, *Principles of Semantics* (1951, 2^e éd. 1959) を検討するリクールの指摘に負う (P. Ricœur, *op. cit.*, p. 153).
- 9) 藤沢令夫訳『詩学』、世界の名著 8 『アリストテレス』所収、中央公論社 (1979年)、第6版、1994年、p. 333 ; Aristote, *La Poétique*, le texte grec avec une trad. et les notes de lecture par R. Dupont-Roc et J. Lallot, Ed. du Seuil, 1980, p. 106. 他に次の二書を参照する。 *Poétique*, trad. J. Hardy, Les Belles Lettres, 1965 ; *Poetics*, translated by S. H. Butcher, New York : Hill and Wang, 1961. なお、ギリシア語はラテン文字で転記する。ただしアクセント符号は省く。
- 10) « déplacement » (D.-R. et L., p. 107) ; « transport » (H., p. 61) ; « transference » (B., p. 99).
- 11) « un nom impropre » (D.-R. et L.) ; « un nom qui en [chose] désigne une autre » (H.) ; « an alien name » (B).
- 12) A. Bailly, *Dictionnaire Grec-Français*, Hachette (1950), 26^e éd., 1963, p. 1384. この言語上の事実を指摘しながら、リクールは隠喩を名詞にのみ結合する伝統的な『詩学』理解の限界を語り、語のそれを超える言説レベルの隠喩の存在を示唆している (P. Ricœur, *op. cit.*, p. 20 sv.). しかしまず問うべきは文章の意味である。その点では著者は伝統に従っている。もし« onoma »が「語」を意味し、従って動詞を含みうるのであれば、メタフォールは事物の指示のみならず事実の記述にもおよぶことになり、言説レベルでの隠喩の可能性は『詩学』テキストから難なく析出できるだろう。
- 13) 仏訳はいずれも« noms »で、英訳は« words »で訳出している。藤沢訳は語 / 名詞の間でゆらいでいる訳ではない。括弧内の訳注「名詞・形容詞等」は動詞を排除する (p. 331参照) のでなければ、不必要であろう。訳文での「語」は「名詞」(種) をこれまた類の名によってカヴァーする「転用」に他ならない。
- 14) 名詞とならびたつ品詞としての「形容詞」の考え方は西欧において18世紀に出現する。二つの種「実体名詞」および「形容名詞」を統合する類としての名詞概念、そしてフランスにおける体系の組み換え (名詞 vs 形容詞) については、拙論« Le nom adjectif dans la *Grammaire* et la *Logique* de Port-Royal », in *Le rayonnement de Port-Royal, Mélanges en l'honneur de Philippe Sellier*, H. Champion, 2001, pp. 173-183 参照。
- 15) この分割における« onoma »の訳として、英仏訳はそれぞれ« word »« nom »を維持している。
- 16) « Les noms eux-mêmes sont... » (D.-R. et L., p. 109) ; « Considérés en eux-mêmes, les noms sont... » (H., p. 63) ; « Nouns in themselves are... » (B., p. 100). 斜字体筆者。
- 17) D.-R. et L., p. 346, n. 5.
- 18) Cf. « analogie » (D.-R. et L., p. 109) ; « rapport d'analogie » (H., p. 62) ;

『ルイ大王の世紀』における比喩(2)

- « analogy or proportion » (B., p. 99).
- 19) D. W. Lucas, *Aristotle's Poetics*, Oxford, 1968, p. 204 (cf. P. Ricœur, *op. cit.*, p. 24).
 - 20) 他の部類の記述では現れない« homoiōs ekhein »が第4種の件で頻出する(1457 b 17, 20, 28) ことに注意しなければならない。
 - 21) 「ミメシスは類似ないし相似の、すなわちメタフォールの条件として常に措定されるものの理論的な知覚なしにはあり得ない…」に始まるデリダの指摘 (J. Derrida, *art. citée*, pp. 282-283) 参照。
 - 22) Perrault, *Parallèle...*, « Préface », *op. cit.*, Slatkine Reprints, p. 14 b-c.
 - 23) Perrault, *Parallèle...*, t. IV, 5^e Dialogue, p. 293 ; Slatkine, p. 357.
 - 24) Pascal, *Pensées*, 45 (éd. Sellier) ; 11 (éd. Lafuma) ; 246 (éd. Brunschvicg).
 - 25) ペローのライトモチーフに呼応するルナンの、もちろん未来時制による文章はもう少しニュアンスに富んでいる。「人類が自己を宣言した場所である庭球場(ジュ・ド・ポーム)はいつの日か神殿となるであろう。時間の隔たりによって個別的な事象が聖別され、一般的事実の象徴として特徴づけられるに到った時には、人々はそこにあたかもイエルサレムにののようにやって来るであろう。ゴルゴタはイエスの二三世紀後に聖地となったのである。」(Renan, *L'Avenir de la science*, *op. cit.*, p. 494, n. 7).